来原良蔵と公武合体運動について

長富　優

はじめに

長州藩士来原良蔵は、文政一二年（一八二九）に長門国阿武郡で生まれ、文久二年（一八六二）に三四歳でその生涯を終えた。彼は藩校明倫館で文武を兼修したのち、嘉永四年（一八五一）の江戸詰に際して安積艮斎に従学した。彼は松陰と同年輩で親しく、松陰が嘉永四年に実行した東北遊歴や、安政元年（一八五四）の下田踏海に際しては、松陰の心情をよく理解し周旋につくしている。安政四・五年には、山田亦介とともに藩の兵制改革に携わり、西洋型船の購入等洋式化に努めた。彼の文久二年の行動について、『吉田松陰全集』第一二巻（昭和一五年、岩波書店）所載の関係人物略伝から紹介する。「文久二年長崎に在りて蘭人より銃陣の直伝習を受け、時事切迫するや京都江戸に奔走周旋す。この頃公武合体説破れて長藩の首唱者長井雅楽自刃を命ぜらる。来原亦従来この説を持して奔走せるを以て藩論一変により責を感じ、遂に八月暴発攘夷の先鋒たるべく横浜の外人を斬らんとして脱走したるも、世子の懇諭あり泣謝して退き、その夜屠腹して終る。八月二十九日なり」。

この記述には一部事実誤認があるが、(1) それを除けば来原の行動の軌跡がほぼ了解できる。だが試みに人名辞典等を参照すると、同時期の来原の行動について、異なる評価が見られ、史実の把握に困惑を覚える。ここに記述の一部を抜粋する。

（一）来原良蔵は一貫して公武合体に反対し、長井雅楽除去の立場をとっていたとするもの。「文久二年京都に在り長井雅楽を除かんとして同志間に奔走し、更に江戸に下り横浜外館の襲撃を謀る」（『増補近世防長人名辞典』、昭和五一年、マノツ

書店。初版は昭和三二年)。「文久二年都に上り専ら国事に尽瘁し長井雅楽の公武合体の周旋を憎み之を刺殺せんと謀りしも時機を得ず却て同志に二心あるを疑はる良蔵之を憤りて江戸に行く(略)横浜の異人館を焼き払ひ」(『大日本人名辞書』昭和五五年の講談社学術文庫本による。明治一九年の復刻である)。「(文久二年)二月公武周旋のため熊本・鹿児島へ出張、三月上京して留まり、藩老長井雅楽を除くため奔走した。同年八月江戸に行って横浜の外人襲撃を謀ったが、藩世子に過激を誡められ」(『明治維新人名辞典』昭和五六年、吉川弘文館)。

(二)公武合体に同意し雅楽の周旋を援助したとするもの。(a)「文久二年(一八六二)九州を遊歴して情勢を探り、大坂から京都に入って長井雅楽に会見、その航海遠略策に共感し大いに援助した。この間、横浜夷人館の襲撃を企てたが、世子元徳に説得され、(略)七月、藩是であった航海遠略策は久坂玄瑞らによって破約攘夷に大転換し長井は失脚」(『幕末維新人名事典』昭和五三年、學藝書林)。(b)「文久元年(一八六一)長井雅楽の公武一和、航海遠略策を支持し、その遊説を助けたが、翌二年藩の方針が即時攘夷に決定し、長井が失脚したのでその責任を感じ、八月横浜の外人を襲撃して攘夷の先駆をなそうとしたが」(『国史大辞典』昭和五九年、吉川弘文館)。(a)は、夷人館襲撃を企てた時期を誤っている。これだと、公武合体に共感する一方で攘夷実行を企てたこととなり、矛盾が生じてくる。

来原良蔵に関しては、既に妻木忠太『来原良蔵伝』が刊行されている。また、幕末の長州藩の歴史を知るうえでの基本文献である『防長回天史』にも随所に記載がある。この二書における来原の記述には、相違は認められない。ともあれ小論では、来原良蔵が、長井雅楽によって主導された公武周旋活動と、どう関わっていたのか、二書を軸にあとづけていくことにする。

一　長井雅楽と長州藩の公武周旋について

(一)

万延元年（一八六〇）三月におきた桜田門外の変後、新たに幕政を担当した「いわゆる久世・安藤政権」は、朝廷との融和をはかる公武合体政策を採用し、将軍家茂と孝明天皇の妹和宮との婚姻を推進した。幕府は数度にわたって朝廷へ和宮降嫁を奏請したが、七・八年ないしは一〇年以内の条約破棄、または攘夷実行を条件とすることによって、同年一〇月に天皇の勅許を得た。その後プロシアとの条約締結や国内不安等の諸事情から、和宮の東下は翌文久元年一〇月に延期された。実際に婚儀が挙行されたのは文久二年（一八六二）二月であった。

幕府が公武合体政策を展開していくなかで、西南雄藩は朝廷と幕府の間をとりもつことで、自藩の政治的発言力の増大をはかって周旋活動へとのりだした。その動きはまず長州藩から起こった。

文久元年春初、長井雅楽は航海遠略策を著した。雅楽の論策は、「長防二州の内にて智弁第一」[2]と評されるにふさわしく、優に四千字をこえる長文であるが、その眼目は次の箇所にある。

兎に角御国之為、何卒是迄之御凝滞被遊御氷解、伊勢神宮之御誓宜に御随ひ、鎖国之叡慮被思召替、今日より海軍御張立て、我より彼国え押渡り、互市交易を名とし、渠か巣穴を探り、渠か虚喝を押へ、黠夷之恐るゝに足らさる事を士民に知らしめ候様、厳重関東え御下知被為在候はゝ、関東に而も決而異論は有之間敷、即時に承伏可有之、御下知を関東に奉行仕候はゝ、則公武御一和に而、即時に海内一和可仕候、海内一和仕候而、軍艦に乏しからす、海航に熟し士気振起仕候はゝ、一皇国を以、五大洲を圧倒仕候事、掌を指すより猶易く、五大洲貢を皇国え捧候日も亦不遠、斯之如き時勢に相成候はゝ、神祖之叡感不大方、莫大の御大孝と奉存候[3]

雅楽の建策は、藩首脳部の討議にかけられた。この討議には、当時右筆の職にあった来原良蔵も参加していた。その後、手元役の職にあった周布政之助が作成した決議案が、藩主の裁可を得て三月二八日に藩論に決定された。さらに、雅楽が藩主による公の周旋に先立って、朝廷・幕府の意向を打診することとなった。

（二）

雅楽は四月二九日に東上の途についた。彼はまず京都で朝廷の意向をうかがうため、正親町三条実愛を訪ねて、公武周旋の趣旨を言上した。[4] その結果、雅楽は実愛から天皇の公武周旋の内命と、御製の和歌一首等を賜った。その後、雅楽は江戸へと向かい六月一四日に着いている。当時江戸藩邸では、藩の方針に批判的な空気があり、[5] 雅楽は本来の仕事のほかに、このような動きへの対処に忙殺されている。久坂玄瑞・[6] 楢崎弥八郎等と議論を闘わせ、あるいは水戸藩側用人美濃部又五郎と会見するのである。[7] このころ藩命で出府していた周布政之助は、江戸の形勢をみて公武合体は時宜にあわないと判断するようになり、雅楽との間に亀裂を生じるようになった。他方、雅楽の幕閣への働きかけは功を奏し、公武周旋の依頼が長州藩にあった。江戸での目的を達成した雅楽は、江戸を出発し京都に立ち寄ったのち、八月二九日に萩に帰着した。

雅楽の報告を受けた藩主毛利敬親は、本格的に公武周旋に乗り出すため、雅楽を従えて萩を出発し、[8] 江戸に一一月中旬に到着した。一二月八日、敬親は老中久世広周に建白書を提出し、[9] 同月晦日に、将軍家茂の公武周旋依頼の内旨を得たのである。翌文久二年一月初頭、敬親は雅楽を中老格に昇任させ、京都の情勢を詳かに把握するため、再度の上京を命じた。だが、雅楽の上京は、一五日に坂下門外の変が起きたため延期される。二月二四日、幕府は雅楽を召して建白の趣旨を詳述させるとともに、改めて公武周旋を託した。三月四日、雅楽は久世に田安慶頼を将軍名代として上京させ、朝廷に失政を陳謝することを説き賛同を得た。その二日後、敬親は上京の訓令を雅楽に伝えた。[10]

三月一八日に京都に入った雅楽は、翌一九日に三条実愛に会見して江戸での周旋の経過を報告した。さらに敬親が幕府に差し出した建言書の写しと開国航海の旨趣書を手渡した。実愛は二一日に雅楽を招き、「七八年来絶えて無き愉快の儀に接し欣快なり」[11] との天皇の所感を伝えた。雅楽は実愛のほかに中山忠能、岩倉具視、大原重徳等の公卿を訪問して建議の趣旨を直接説き、その実現にむけて努力を重ねた。このように公武周旋は着実に進展していったが、この頃より薩摩藩島津久光の上京が接近し、藩内尊攘派の動きが活発となるなど、藩内外に困難な状況が生まれ、前途は楽観を許さない形勢になってきたのである。

二　来原良蔵の行動

文久二年春初、薩摩藩国父島津久光は、幕政を改革して公武合体の実をあげるため、率兵上京に踏み出す計画をたてていた。久光率兵上京の報は、その真意を了解しない尊攘派志士を強く刺激し、彼らの活発な動きを促した。萩へも薩摩藩の田上藤七、土佐藩の吉村寅太郎・坂本竜馬、久留米の牟田大助（淵上郁太郎）他が訪れ、久坂玄瑞らと会談した。[12] このような情況のもとで、藩政府は薩摩藩および九州の動向を詳しく把握する必要を感じ、その探索方を来原良蔵に命じた。来原は二月二三日に萩を出発して、途中熊本で知人旧友に会い、両藩が提携して義挙を起こすことを促した。その後、薩摩藩領内に三月二日に入った。同地では、有馬新七・村田新八他から薩摩藩の様子を聞き、久光東上の容易でないことを認識し、速に帰国してこれに備えることを急務と判断した。[13] 来原は一七日に萩に帰着した。藩政府は、「御用筋重大機密之儀に而、事情委敷相分り兼候処、速に探索仕罷帰候」[14] とその功績を賞した。さらに薩摩藩その他の情勢を報告するため、東行するように命じた。そこで来原は一九日、使い事の要件を記した覚え書きを携えて、勇躍出発した。

二五日に京都に着いた来原は、前日大坂で遭遇した周布政之助・宍戸九郎兵衛とともに、長井雅楽・井上小豊後を訪れ、薩摩藩の情勢等を彼らに報告した。その一方で、雅楽から江戸の事情について詳しく説明を受け、「江戸之模様大に変革仕候て、御国にて考候とは事替り候」[16] との印象を受け、「薩州へも右之趣篤と相談致候て、彼方之都合次第にて、一先穏に可二相済一と存し申候」[17] という見通しを持つのである。周布は二七日、雅楽・小豊後等と相談して、来原を薩摩藩の動静が決まるまで京の地に留め、同藩他の応接に従事させることにした。来原が携えてきた覚え書きは、周布が代わって江戸に持参することになり、三月二九日に彼は京都を発った。

来原は着京以来、雅楽の話を聞くなかで、攘夷の気慨を衰えさせ公武合体説に服するようになった。この頃の来原について、

同藩の知己奥平数馬は、「来原は又十分秋気粛殺之決心に而罷登候処、少々春風和気に相成申候」と評している。[18]

島津久光の上京が近づくにつれて、尊攘派の動きは一層活発になり、京都・大坂間に多くの志士が集まった。そのなかには、薩摩藩士と気脈を通じて尊王義挙の行動を起こそうと計画している、長州藩士も見受けられた。雅楽は、尊攘派の動きが公武周旋の妨げになることを危ぶんで、彼らの動きを緩和させるために、来原と時山直八を大坂に派遣して、薩摩藩士や他の諸士の説得にあたらせることにした。来原と時山は、四月二日から六日まで大坂に滞在した。その間に、薩摩藩大島三右衛門(西郷隆盛)、岡藩小河弥右衛門、薩摩藩橋口壮助等を相次いで訪問し、長州藩の公武周旋の次序を述べて、了解と意見を求めた。これに対し、三人はいずれも曖昧な返答をしたにすぎなかった。来原と時山は七日に帰京して雅楽に復命した。

雅楽は公武周旋に努力を重ねたが、彼を取り巻く状況は益々悪化していった。浪士のなかには、雅楽を姦物と非難し、生命をねらう者がいた。同じ藩内でも久坂玄瑞らは、雅楽を幕府の走狗とみなして刺殺を企てていた。[19] さらに京都・大坂における尊攘の高まりは朝廷へ波及し、長州藩の公武周旋に対して「甲是乙非議論紛々タリ」[20]といった朝廷の分裂を生み出していった。

三　長井雅楽の蹉跌

藩主敬親は、江戸と京阪の情勢を見て、従来の公武周旋活動に危惧をおぼえ、雅楽を召還することにした。京都での活動に行き詰まっていた雅楽は、敬親の上洛を促す天皇の内旨を携えて、四月一四日に京都を出発した。その頃江戸藩邸では、周布が機密の全権を握っていたが、さらに雅楽到着の前日には、桂小五郎が機務に参与することとなった。このことは、雅楽の地位の低下を示すとともに、従来の周旋活動の変更を予測させるものであった。

世子定広は、国元からの要請によって帰国することとなり、幕府の許可を得て、四月一三日に江戸を発った。定広は寺田屋の変後の京都に二八日到着した。定広は滞京中の五月五日、中山大納言をとおして廷旨を授かった。[21] その廷旨には、雅楽の建

白中の文言について、「朝廷御処置聊謗詞に似寄候儀も有之」という指摘が記されていた。この「謗詞」とは、鴻臚館時代の往昔と今日の開国を同一視しているという点にあった。また、同廷旨には「開国航海之儀は第一御国体変動不容易儀に付軽易に叡断難被遊」と記述されており、雅楽の航海遠略論は全く否定されたのである。長期にわたった雅楽の周旋活動は、ここに水泡に帰した。

この所謂「謗詞似寄」の一件より、雅楽を非難攻撃する藩内尊攘派の声は一層激しくなり、遂に雅楽は「乍恐被為対朝廷上御面目相立候様御厳譴被仰付[22]被下度奉願候」と待罪書を差し出した。六月五日、雅楽は帰国のうえ謹慎[23]を命じられた。

四　来原良蔵の自死

来原は五月八日、前の廷旨伝達のために、江戸に赴くよう命じられた。しかし、来原は「先日以来胸痛相煩ひ、頃日別而差重[24]」り、旅行は困難であるとして、藩命を辞退した。その後来原は、欝々とした日々を過ごしていたが、六月に「謗詞」一件について、次のように心情を吐露している。「計らす内外の混雑よりして、叡慮にふるゝ事の出来しは、実以恐れ入りたる次第に候、これ全く最初より其議にあつかりし愚臣の心、不行届よりかゝる次第に立至り候にて今更其罪のかるゝに処なく、重畳恐れ入り奉り候[25]」。航海遠略論に当初から関わってきた、自己の責任の重さを痛切に反省して、深く衷心から恐懼の念を表明している。またこの頃、「死をもって罪をつくのうの外致し方これなく」と自死の意志を表明し、「雲霧をはらえる空にすむ月をよみちにはやく見まほしきかな」と、辞世の歌を詠んでいる[26]。同月下旬から七月初頭にかけて、来原は両親・妻子等に遺書を認めている。

長州藩は安政五年以来、「朝廷への忠節、幕府への信義、祖先への孝道」を所謂藩是三大綱として打ち出しており、その基本路線上に公武周旋が展開されてきたのである。しかし、公武周旋は挫折におわり、かわって尊攘運動が盛りあがっている文

久二年七月六日藩是は破約攘夷に転換した。それは朝廷への忠節を唯一至上なものに掲げ、幕府否定の論理を内在させているものである。「朝廷えは兼而之思召通御忠節、幕府えは御信義、先祖様えは御孝道、若御忠節疵付候時は信義は被成御欠候事も有之、御両国へ被為易事も可有之」[27]。

来原は深い苦悩の境涯に沈潜していたが、彼の才幹を惜しむ周布ら藩の要人によって、江戸の有備館御用掛として差遣されることとなった。八月一〇日[28]に命をうけた来原は、やむなく二日後に京都を出発し、二五日に江戸に着いた。来原は江戸に下る途中で、攘夷の実行（外人の襲撃）を決意した。彼は横浜に外人を襲撃しようと、二七日に脱藩したが、翌日発見され連れ戻された。世子定広の慰諭をうけたが、二九日の払暁切腹して果てた。

「私儀兼而尊王攘夷之志不行届よりして、従来忠義と相考候事、都而不忠不義と相成、自あまり人をあやまるの罪、遁るゝ所なく余儀なく割腹仕候」[29]。来原良蔵三五歳であった。

おわりに

来原良蔵は、藩の公武周旋活動と当初から密接な関わりをもち、尊王義挙へ傾斜した一時期があるにせよ、概ね公武合体の立場にたち、長井雅楽の活動を支援したのであった。小論の初めに指摘したような記述の相違が、何に起因するかは明白ではないが、辞典等の史実の記述には特に適正を期するべきだと思う。なお、来原の読み方について、「くりはら」・「くるはら」が相半ばしていることを付け加えておく。

註

（1）来原が文久二年に、長崎で蘭人より銃陣の直伝習を受けたというのは、誤りである。『来原良蔵伝』上巻（昭和一五年）所収の年譜によると、来原は文久二年一月二八日に民情視察の為に徳地宰判へ出張し二月九日に萩に帰っている。来原は安政五年一一月末から、約半年間長崎に出張しているが、その間にオランダ人のカッテントレーキ・セルジアントから伝習を受けたのである。

(2) 越前藩士中根雪江が長井雅楽を評して述べた言葉である（『修訂防長回天史』上巻、〈昭和四二年、柏書房〉万延文久記第七章）。

(3) 『周布政之助伝』上巻（昭和五二年、東京大定出版会）六三二頁。

(4) 雅楽と実愛の会見は五月一五日に行われた。雅楽の建言に対して、実愛は賛同の意を表明し、さらにその内容を文章にして差し出すよう要請した。雅楽は、陳述の内容を文書にしたためて二三日に提出した。これは雅楽が同僚の林主税等に提出した建策をもとに、字句の修正や文章表現を穏やかなものに改めるなどの配慮を加えたものであった。

(5) 「当時藩地には既に雅楽の建策に異論者あり老年者は藩主をして時勢の渦中に投ぜしむるを危み壮年志士は其公武周旋を以て佐幕の奸策と為し雅楽が江戸に入るの日に当ては已に延て江戸邸に影響し物議頗る多し雅楽口を極めて弁明すと雖ども纔に表面を鎮圧し得たるのみ然れども之れを以て屈すべからず」（『修訂防長回天史』上巻、万延文久記第七章）。

(6) 久坂玄瑞は、三月二五日に航海遠略策反対の進言を、政務役中村九郎兵衛に行って以来、機会あるごとに同策を批判している。「己未の年御参府に相成候節も、公武御合体の説を口実と仕、幕吏暴威を振ひ、御賢明の公卿諸侯方を押込め、草莽有志の士を放逐斬戮等せしめ候折柄、竟に公駕を江戸に奉し、阿諛奔趨御昇進なと周旋いたし、千載の御恥辱を受させなから、於二御当家一罕なる御面目なと相唱候段、実に流悌慨嘆之至に奉レ存候、是等を以熟考仕候に、公武御合体なと唱候者恐くは口実にて可レ有二御座一候得者、此時節柄にて御参府被レ為レ在候而者、尊攘之御夙志相貫不レ申、竟に御当家之御名望、御失ひ被レ遊候様に立至り可レ申」（文久元年五月二七日付益田弾正宛書簡。『久坂玄瑞遺文集』上巻二七四頁）。雅楽と久坂は六月中に都合四度意見をたたかわせたが、両者の意見は平行線をたどったままで終わった。「長印とも遂に議論仕候処、只に喧嘩に相成計にて、我々の議論相貫き候様も無レ之、嘆息の至此事に御座候」（文久元年七月五日付入江杉蔵宛書簡。同右二八七頁）。

(7) この会見は桂小五郎の奔走によるものであった。彼は前年松島剛蔵とともに、水戸藩士西丸帯刀等との間に幕閣改造をめざす丙辰丸盟約を結んでいた。これを有志間の提携から両藩の提携へと深めようと、有力者相互の会見を画策していた。この会見は、雅楽の弁論に美濃部が圧倒され、桂の思惑ははずれた。なお、桂も公武合体には反対であった。「当時之姦吏等と相謀り自然勅意を緩め奉り違勅御手伝い之姿ともに相成候而は天下の正気に相触れ」と激しく批判していた（文久元年六月一一日付周布政之助宛書簡。『木戸孝允文書』第一巻一三七～一三八頁）。桂は六月から七月にかけて、来原に書簡を三度送って関東の事情を報じ、公武周旋に反対の意志を表明している。来原は八月一五日の返書で、「長井周布とも、御地に罷居申談し候而、周旋仕候事、左まて迂濶なる事も有レ之ましく」と述べ、周旋の奏功を期していた（『来原良蔵伝』下巻二四六頁）。

(8) 周布は雅楽が江戸を去った後、内外の藩務に任じていたが、水戸藩士西丸帯刀等との交際や久坂・桂との議論のなかで、公武合体への批判を深めていった。彼は藩主を上府途中に迎え、関東の形勢を説明して航海遠略策の不可を進言しようと久坂とともに江戸を出発した。この挙は不成功に終わり、周布は免職され逼塞の身となった。

(9) 「御国体相立候へば開鎖和戦は時の宜に随ひ守株膠柱の儀は有之間敷然るに又御国体を相立候基本と申候へば大倫大義を明かにし天下の議論純一人心和協の御処置に可有之哉」と公武合体の原由を説いている。さらに、「今一際天朝御崇奉の御取扱振世上へ相顕れ候はゞ天下の人心感服仕」と幕府の一層の朝廷尊崇の必要を唱えている。その上で、勅諚によって開国の国是を発表し、幕府が遵奉することを勧めている(『修訂防長回天史』上巻万延文久記第四章)。

(10) 雅楽への訓令には、「兼て相窺置候御趣意を基として機に臨み変に応じ候取扱振御自分校量を以無抜目可有取計候」とある。また、島津久光上京への対応があわせて指示されている(同右万延文久記第一三章)。

(11) 『維新史』第三巻一八頁。

(12) 竜馬は武市瑞山の指示によって訪問したものである。この時玄瑞が武市に差し出した返書には、「竟に諸侯不足恃、公卿不足恃、草莽志士糾合義挙の外には迚も策無之事」と、所謂草莽横断組織論が表明されている(『久坂玄瑞全集』五〇二頁)。淵上郁太郎は真木和泉の門人である。彼らから薩摩藩の動向と、有志の奮起する状況を知った久坂は、「御国数百年来勤王者御召家柄に候処此度薩に先鞭を被着候事固遺恨千万」と切歯扼腕し、数名の同志だけでも義挙に応じようと決意している(二月二三日付け久保清太郎宛久坂玄瑞書簡。同右五〇四頁)。さらに、堀真五郎を薩摩藩に派遣して実情を探ろうとするのであった。

(13) 来原は鹿児島城下に数日滞在するが、希望した大山格之助、樺山三円との会見を実現できないままに、同藩監察府の命によって城下を出発した。その際、来原は「義挙に応せん事」を表明している。その後市来において、宮部鼎蔵・小河弥右衛門とともに、有馬等から次のような話を聞いたのである。「此方に於て、義挙と申訳は之れ無く候得共、今度和泉関東へ罷出候処、近年京都江戸の間、何分不穏の御様子に聞へ、先主薩摩守斉彬没期にも、和泉へ申置の旨も有之、其辺に付ても、段々盡力致され候所存には御座候、品に由り掛合申さるゝことも之れあるへく、其節は必す御一致下され候様致され度」(『来原良蔵伝』下巻二七五頁)。

この頃の来原は、昨年保持していた公武合体の考えからはなれ、尊王義挙の実現に共鳴していた。

(14) 同右二七七頁。

(15) 周布は逼塞の期間を終え、三月一四日に藩命で当職所の内用に任じられて東上の途につき、来原に一歩先んじて大坂にあったのである。

(16)(17) 来原が三月二八日付けで、萩の両親に送った書簡（同右二九一頁）。

(18) 奥平数馬が三月晦日付けで桂小五郎に送った書簡（同右二九三頁）。雅楽に説得され、もとの公武合体説に戻ったとはいえ、尊攘の気概に燃え、死を覚悟して東上したのである。しかし、こと志と相違し、さらには薩州告諭を命じられ、彼の心中は煩悶するものがあった。来原は同月二九日、桂小五郎に帰国穏退の気持ちを書き送っている（『松菊木戸公伝』上巻一一四頁）。

(19) 「薩州人其外浪士私を姦物と名目仕り刺の突のと申評判誠に高く堂上地下大気遣之様子にて色々存寄も有之と乍恐叡慮へも入候と歟私之面目此上死て遺憾更に無之此時こそ毛利家之御武威相立候節とりきみ居申候薩人無智にても左様之愚なる事は致し不申左様之不義を致し天下へ名義は相立間敷多分刺の突の姦物のと申事は御内輪より起り候事哉と相考候」（四月八日付けで雅楽が林主税におくった書簡。『修訂防長回天史』上巻万延文久記第一三章）。

(20) 『岩倉公実記』上巻五三五頁。公家の村井政礼は三月三〇日の日記に次のように記している。「建議之趣意以勅命開航海卜之事従来老中伝来之和交説致潤色一転増長シテ以勅諚航海相開度段申立候事大膳大夫関東阿党之奸説故何卒御所向右等之説ニ御迷無之様」（『孝明天皇紀』第三巻八三三頁）。

(21) 同右八六二頁。この廷旨が出されるにいたった背景には、久坂玄瑞等の画策があった（『忠正公勤王事績』二二一頁）。

(22) 『修訂防長回天史』上巻万延文久記第一五章。待罪書を提出したのは五月二〇日である。

(23) 雅楽は、翌文久三年二月六日、藩命によって切腹した。

(24) 『来原良蔵伝』下巻三二二頁。

(25) 同右三三八頁。

(26) 同右三四三～三四四頁。

(27) 『周布政之助伝』下巻一一九頁。

(28) この日に書いた文章には、次のような一節がある。「是まて御不都合の次第残らす私身上に御請負せ候て、因循不断の弊習を一新して、疑似の蒙昧を洗雪し、愈尊王攘夷の御忠節奉ニ冀願一候」（『来原良蔵伝』下巻三五二～三五三頁）。

(29) 同右三九一頁。